

本文章已註冊DOI數位物件識別碼

▶ 芥川龍之介の初期の漢詩一梅の花の世界

doi:10.29714/TKJJ.199803.0007

淡江日本論叢, (7), 1998

作者/Author： 彭春陽

頁數/Page： 139-149

出版日期/Publication Date：1998/03

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

<http://dx.doi.org/10.29714/TKJJ.199803.0007>



DOI Enhanced

DOI是數位物件識別碼（Digital Object Identifier, DOI）的簡稱，是這篇文章在網路上的唯一識別碼，用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 <http://doi.airiti.com>

For more information,

Please see: <http://doi.airiti.com>

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE



芥川龍之介の初期の漢詩

—梅の花の世界—

淡江大学講師

彭 春 陽

龍之介の養家芥川家は由緒のある旧家であり、養父道章からはじめ養母儔および実際に龍之介の面倒を見ていた伯母フキは、みんな教養人であった。そのため、小学校に入った龍之介は学校の勉強の外に、英語と漢文と習字の学習にも通わせられた。『追憶』（注1）の「学問」の項に次の記述がある。

僕は小学校へはひつた時から、この「お師匠さん」の一人息子に英語と漢文と習字とを習った。が、どれも進歩しなかった。唯英語はTやDの発音を覚えた位である。それでも僕は夜になると、ナショナル・リイダアや日本外史をかかへ、せつせと相生町二丁目の「お師匠さん」の家へ通つて行つた。It is a dog——ナショナル・リイダアの最初の一行は多分かう云ふ文章だつたであらう。しかしそれよりはつきりと僕の記憶に残つてゐるのは何かの拍子に「お師匠さん」の言つた「誰とかさんもこの頃ぢや身なりが山水だな」と云ふ言葉である。

相生町二丁目に住んでいる「お師匠さん」という人は、芥川家の一中節の師匠だった、宇治紫山のことである。龍之介は宇治紫山の息子大野勘一に、英語・漢文・習字を習ったのである。それから、「小学校へはひつた時」というのは、明治三十一年（一八九八年）に江東尋常小学校に入学した時点を指すのではなく、多分高等科一年に進級した明治三十五年（一九〇二年）、龍之介が——歳の頃だつたであらう（注2）。少年芥川の漢文勉強の嚆矢と見られるこの学習について、本人がそれほど評価しなかったけれども、漢文への開眼という点で見れば、とても重要な意味を持っている。

『日本外史』をテキストとして、漢文世界に入った龍之介は、徐々に漢詩の範疇にも踏み入れるようになった。中学時代には漢詩をかなり読んだという（注3）。この時期の漢

詩勉強の成果の一角として、現存の書簡を通して伺うことができる。東京府立第三中学校を卒業して間もないごろの明治四十三年七月三日に、中学校時代の恩師広瀬雄に当てた手紙に次の一節がある。

今日朝来微雨独座して許丁卯の詩集を繙く一味の暗愁の霧の如く人に迫るを感じ候殊に其懷古七律の如き格調痛哀李義山に比すれば更に微、温飛卿（注、卿の間違い）に比すれば更に麗、青蓮少陵以降の七律を以て斗南第一人の名ありしもの誠に偶然ならず候

読書の感想を先生に報告するという形で書かれたこの箇所では、李白のことを青蓮と、杜甫のことを少陵とわざわざ言い換えるところに、師に学識を誇示しようとする嫌いが無いでもないが、しかし、当時一九歳だった龍之介がこれだけの漢詩鑑賞力を持っていたことに驚かされる。

中学時代までに、漢詩をたくさん読んだだけでなく、漢詩の習作をもさせられたようだった。「野人生計事」（注4）には、その時の手本の役をつとめたものとして、次の李九齡の「山中、友人に寄す」（『全唐詩』巻七三〇所収）が挙げられた。

乱山堆裡結茅廬	乱山堆裡、茅廬を結び
已共紅塵跡漸疎	已に紅塵共に、跡漸く疎なり
莫問野人生計事	問うなかれ野人生計の事
窓前流水枕前書	窓前の流水、枕前の書

このあまり有名でもない漢詩に倣って、芥川龍之介はどんな漢詩習作を書いたのか、現存の資料にはそれらが残っていないため、もはや知る由がないが、後の龍之介の書いた漢詩から見れば、「窓前流水枕前書」という句より、漢詩と読書環境描写との関連性を強く龍之介の脳裏に焼き付けたのであろう。つまり、漢詩を作ろうとすれば、先ず思いつくのは身辺の読書環境を描くことであり、或いはその逆の、勉強しているうちに周りを見回し、ふと漢詩を書きたくなるということであろう。

芥川龍之介の作った漢詩は、作品として発表したものが殆どなかった。現存の多くは書

簡に残っている。そのため、本論では書簡を中心に、年代順に追って、龍之介の書いた漢詩をすべて摘出し、分析してみようとする。テキストは岩波書店出版の『芥川龍之介全集 第十七巻 書簡Ⅰ』（一九九七年三月一〇日発行）と『芥川龍之介全集 第十八巻 書簡Ⅱ』（一九九七年四月八日）、『芥川龍之介全集 第十九巻 書簡Ⅲ』（一九九七年六月九日）、『芥川龍之介全集 第二十巻 書簡Ⅳ』（一九九七年八月八日）である。

明治四十五年（一九一二年）以前の書簡に漢詩を見当たらないので、便宜上明治四十五年から大正二年（一九一三年）までを＜初期の漢詩＞とする。この二年間に書かれた漢詩は次の四首である。

春寒未開早梅枝　幽竹蕭々垂小池
新歲不來書幄下　焚香謝客推敲詩
（明治四十五年一月一日　山本喜譽司宛）

春寒未發早梅枝　幽竹蕭々匝小池
新歲不來書幌下　焚香謝客獨敲詩
（明治四十五年一月一日　井川恭宛）

簷戸蕭々修竹遮　寒梅斜隔碧窓紗
幽興一夜書帷下　靜讀陶詩落燭花
（大正元年十二月三〇日　小野八重三郎宛）

寒更無客一燈明　石鼎火紅茶靄輕
月到紙窓梅影上　陶詩讀罷道心清
（大正二年十二月九日　淺野三千三宛）

この四首の漢詩は類似点が多い。

- ① 七言絶句である。
- ② 一人で漢詩を書いたり読んだりする設定である。
- ③ 「梅」を吟ずるもの。

山本喜嘗司宛と井川恭宛の漢詩は基本的に同一の詩であるが、「未開」を「未発」、「垂小池」を「匣小池」、「書幄」を「書幌」、「推敲詩」を「独敲詩」のように、一句ずつに一文字が違う。芥川龍之介の「推敲」の苦心が見られる。この二首共に年賀状に書かれた新年挨拶のもので、一首は府立三中時代の親友である山本に、もう一首は一高の同級生の井川に宛てた贈答詩である。この二首が一首となれば、次の小野八重三郎宛の漢詩が出るまで、一年も掛かった。

小野八重三郎は芥川の府立三中の一年後輩である。小野宛の漢詩は手紙の最後に添えた形で書かれたものであり、手紙の冒頭に「諒闇中とて新年の御慶は御遠慮致すべく候」との前置きがある。この年の七月に明治天皇が亡くなったからである。次に「休暇の半を過ぎ候へども如例散漫に消光致居候／歳末歳始御暇の節御出下され度炉に火あり鼎に茶あり以て客を迎ふるに足るべく候」を書き、最後に「悪詩を以て近状御知らせ申候へば御一笑下さるべく候」と断った後、「簷戸蕭々修竹遮 寒梅斜隔碧窓紗／幽興一夜書帷下 静読陶詩落燭花」を付した。故に、この漢詩も新年贈答詩の類いと見てよい。前の贈答詩から今度の贈答詩まで一年掛かったにもかかわらず、ただ「幽竹」が「修竹」に、「早梅」が「寒梅」に、「書幌」が「書帷」に、「独敲詩」が「読陶詩」に変わったぐらいで、内容としてはほとんど前の詩の踏襲である。

浅野三千三宛の漢詩は同じく手紙の最後に付したものである。浅野もまた芥川の府立三中の後輩で、この時期によく芥川と手紙の行き来をする。『芥川龍之介全集』で書簡番号一三二に当たるこの手紙で、芥川は「此頃又柳宗元を少しづゝよみ居り候小生は最柳文を愛するものに候昌黎が柳州の文をよむに先だち必薔薇水を以て手を洗へる誠にうべなりと思はれ候短けれど至小邱西小石潭記に柳々州の真面目を見るべし読下清寒を生ずる心地せられ候」と、読書の感想を述べた後、おわりに「悪詩御笑ひ下され度候」と断りながら、「寒更無客一燈明／石鼎火紅茶靄輕／月到紙窓梅影上／陶詩読罷道心清」を付け加えた。この詩を前記の小野八重三郎宛の手紙と併せて読むと、一年間の隔てがあってもやはり大きな変化が見られない。例えば、「寒更無客一燈明」の深夜の静けさと明かりは「幽興一夜書帷下 静読陶詩落燭花」からの脱皮であり、「石鼎火紅茶靄輕」は「炉に火あり鼎に茶あり」の漢詩化した表現である。「月到紙窓梅影上」の情況は「寒梅斜隔碧窓紗」と一致するし、「陶詩読罷道心清」も「静読陶詩」からの転用である。浅野宛の手紙によれば、「清寒を生ずる心地」にさせられたのは陶淵明の詩ではなく、柳宗元の「至小邱西小石潭記」という文章であった。だから、本当は「柳文読罷道心清」のはずだったが、「柳文」

を「陶詩」にすり替えられた。

前にも述べたように、芥川龍之介は幼い頃、李九齡の「山中、友人に寄す」を手本に漢詩の習作をしたことにより、漢詩を作ろうとすると、すぐ七言絶句の格調で、書斎だの読書だのと結び付くようになる。上記の初期作品四首ともにこの範疇に属され、漢詩習作の延長線に位置付けをすべきであろう。

もう一つの類似点は「梅」である。芥川は「梅花に対する感情」（注5）という随筆に、「梅花を見る毎に、まづ予の心を捉ふるものは支那に生じたる文人趣味なり」と書いてある。日本を代表する花は桜とすれば、中国を代表する花は梅であろう。では、梅から何を連想するかというと、芥川は同随筆で次のように述べた。

予等は梅花の一弁にも、鶴を想ひ、初月を想ひ、空山を思ひ、野水を思ひ、断角を思ひ、書燈を思ひ、脩竹を思ひ、清霜を思ひ、羅浮を思ひ、仙妃を思ひ、林処士の風流を思はざる能はず。

芥川龍之介は何が根拠で梅から「鶴」「初月」「空山」「野水」「断角」「書燈」「脩竹」「清霜」「羅浮」「仙妃」「林処士」などを連想したのであろう。

まず、梅と鶴を見てみよう。日本的な考え方では、梅といえば鶯を連想するが、芥川龍之介はなぜ鶴を連想するのであろう。それは中国の「梅妻鶴子」という故事から来たのである。清の呂留良等の書いた『《和靖詩鈔》序』（注6）によれば、宋の林逋が杭州西湖の孤山に隠遁して、妻子なく、唯梅をたくさん植え、鶴を飼う。故に、人に「梅を妻とし、鶴を子とす」と言われ、のちに「梅妻鶴子」は風流な生活の形容となった。一方、魯迅は「梅妻鶴子」から風流な生活ではなく、ものさびしい味気無い生活を読み取った。魯迅の『集外集』に《阻郁達夫移家杭州》という詩がある。

錢王登假仍如在、伍相隨波不可尋、
平楚日和憎健翮、小山香滿蔽高岑。
墳壇冷落將軍岳、梅鶴淒涼處士林、
何似拳家遊曠遠、風波浩蕩足行吟。

將軍岳とは岳飛のことで、処士林とは林逋のことである。岳飛のお墓と林逋の隠遁地は共に杭州にあるので、魯迅は郁達夫が杭州に引っ越すのを阻止しようとして、それを引用し、杭州に住むべからずと主張する。

次に梅と初月との関連性を見てみよう。宋の汪藻の《点絳脣》詞に“新月娟娟、夜寒江静山銜斗。起来搔首。”という句があり、李白の《従軍詩》にも“笛奏梅花曲、刀開明月環”という描写がある。他には、范成大の《親戚小集詩》に“月從雪後皆奇夜、天向梅邊有別春。”、楊万里的《和周仲覺詩》に“春在梅邊動、寒從月外来。”などがある。中国の漢詩では、梅と月に関する歌は決して少なくはない。

梅と空山、野水、断角との関わりを調べてみたが、なかなか見当たらなかった。強いて言えば、蘇軾の《清遠舟中寄耘老》という詩にある“小寒初度梅花嶺、萬壑千巖背人境。”の句と、范成大の《天平先隴道中時將赴新安掾》詩の“霜橋冰澗淨無塵、竹塢梅溪未放春。”という句と、杜牧の《寄李起居四韵》詩の“楚女梅簪白雪姿、前溪碧水凍醪時。”ぐらいしかなかった。しかし、梅を空山、野水、断角と並べれば、中国の水墨画の世界を思い出させる。或いは、芥川龍之介は中国の絵画から空山、野水、断角を思い出したのであろう。

梅と書燈に関する詩句は、次のようなものがある。

書燈看膏盡、鉦漏歷歷數。（蘇軾、《食檳榔詩》）

雲沈梅屋古、書擁雪燈殘。（方岳、《知郡陳告院挽詩》）

梅塢任從長笛弄、竹窗閑把短檠挑。（朱熹、《雪後詩》）

香返梅魂春一脈、愁叢燈影夜千端。（張養浩、《客中除夕詩》）

月侵燈影吏方去、春遍梅梢官未知。（范成大、《坐嘯齋書懷》）

中国で四君子といえば「梅・蘭・竹・菊」であり、歳寒三友といえば「松・竹・梅」または「梅・水仙・竹」である。いずれも梅と竹が入っている。梅と竹は古来から中国の文人の賞賛を多く受け、漢詩では梅と竹を吟ずる詩句は枚挙に遑がない。以下はその代表的なものを挙げる。

梅尉吟楚声、竹風為淒清。深虚冰在性、高潔雲入情。

（孟郊、《同從叔簡酬盧殷少府》）

杜鵑竹裏鳴、梅花落滿道。（《樂府詩集・清商曲辭一・子夜四時歌春歌六》）

梅邊竹外三杯酒、歲尾年頭幾局棋。（戴復古、《朱行父留度歲詩》）

臘果綴梅枝、春杯浮竹葉。（蘇軾、《月季花再生詩》）

午窗鈎竹影、凍筆點梅魂。（袁桷、《述舊詩》）

中国では、梅の花は霜の試練を耐えてからこそ、高潔な姿が現れるのだとよくいわれる。梅と霜の連想はごく当たり前であろう。宋の鮑照の樂府《梅花落》に「中庭雜樹多、偏為梅咨嗟、問君何獨然、念其霜中能作花、露中能作實、搖蕩春風媚春日、念爾零落逐風飄、徒有霜華無霜實。」という描写がある。

羅浮とは、羅浮山（注7）のことであり、広東省増城県の東北三十里の所にある。東晉の葛洪が仙術を得た所と伝える。山の麓は梅の名所として古来名高い。清の屈大均の『廣東新語』『梅花村』（注8）によると、梅花村は羅浮山の入り口にあり、麻姑・玉女の二峰に面している。そこの牛羊が踏むところはみんな梅である。蘇軾の《松風亭下梅花盛開再用前韻詩》には、“羅浮山下梅花村、玉雪為骨冰為魂。”という句がある。

「羅浮之夢」（注9）という故事もある。隋の趙師雄が羅浮の梅花村に泊まり、夜、梅花の精が美人の姿で現れ、趙に会った話である。殷堯藩の《山中梅花詩》に、“好風吹醒羅浮夢、莫聽空林翠羽聲。”がある。

次に、梅と仙妃との関係について述べよう。ここの仙妃の仙は漢の梅福のことであり、妃は唐玄宗の妃、江采蘋のことであろう。

梅福は漢の寿春の人で、字は子真である。小さい頃、長安に学び、尚書・穀梁春秋に精通する。郡文学となり、南昌尉に補せられる。のち、官位を捨て家に居する。元始の時、王莽が政權を握った後、妻子を捨て、九江に行く。噂によれば、仙人になったという。その後、会稽で梅福を見た者があり、彼は姓名を変えて吳市の門卒となったといわれた。梅生、梅仙とも呼ばれる。梅福を詠う詩句は次のものがある。

范蠡出江湖、梅福入城市。（謝靈運、《会吟行》）

乃知梅福徒為爾、軫憶陶潛歸去來。（高適、《封丘作》）

入市逢梅福、游仙訪葛洪。（夏完淳、《避地》詩の三）

梅仙自是青雲客、莫羨相如卻到家。（溫庭鑑、《送陳假之侯官詩》）

韓公淪堯藥、梅生隱市門。（江淹、《詠史詩》）

自歎梅生頭似雪、卻嫌落令髮如霜。

（錢起、《題郎士元半日吳村別業兼呈李長官詩》）

江采蘋は唐玄宗の妃であり、梅が好きなので、玄宗に「梅妃」という名をつけられた。

後、楊貴妃に妬まれ、上陽宮に移された。「安史之乱」の時に亡くなった。『梅妃傳』（注10）がある。

最後の林処士は「梅妻鶴子」の主人公林逋のことである。梅花処士ともいわれる。前掲の魯迅の“墳壇冷落將軍岳、梅鶴淒涼處士林。”の他に、清の龔自珍の《己亥雜詩》の二四五に、“牡丹絶色三春暖、豈是梅花処士妻？”という句がある。

以上述べて来たように、芥川龍之介の梅からの連想はすべて中国に典拠が見られる。つまり、芥川の思惟の中で、梅からの連想は中国の文芸と切っても切れない関係にあると考えられる。

それでは、芥川の梅の連想から、上記の四首の漢詩をもう一度検討してみよう。

先ず、山本喜譽司宛のを見てみよう。

春寒未開早梅枝　幽竹蕭々垂小池
新歲不來書幄下　焚香謝客推敲詩

「春寒」は春に寒さであり、漢詩に多く使われている。例えば、杜甫の「送孔巢父謝病歸遊江東兼呈李白詩」に「春寒野陰風景暮」の句があり、張謂の「杜侍御送貢物戲贈詩」に「孤舟江上畏春寒」の句があり、杜牧の「貴池県亭子詩」に「強半春寒去却來」の句がある。そして、「春寒未開早梅枝」に似た描写に、楊中陳の「春寒詩」の「春寒畢竟無多日、桃李何須怨未開」というのがある。

梅から次の「幽竹」を書き出すのは、芥川流の連想で言えばごく当たり前である。「蕭

々」は寂しいありさまであり、次の句の雰囲気につながる。「垂小池」はしなやかな竹が池のほうに垂れるという意味である。

前にも言ったように、この漢詩は年賀の贈答詩なので、「新歳」を使って正月を描く。「書幄」は「書幌」、「書帷」と同じ意味で、書斎のたれぎぬであり、時に書斎を指す場合もある。なかんずく「書幌」がよく使われ、漢詩に多く見られる言葉である。例えば、唐の劉長卿の「過裴舍人故居」の詩に「書幌無人常不捲」があり、宋の蘇軾の「雪後書北台壁」に「五更曉色來書幌」がある。

芥川龍之介は大正三年一月一二日、小野八重三郎に送った手紙に「それからずつうちにゐた 電話は皆留守だと云つて断つた 閉門謝客独敲詩と詩人が云つてゐる 居留守は支那文学の伝へた風流の一である」とあった。「焚香謝客推敲詩」はこの「閉門謝客独敲詩」からきたのに間違いない。「焚香」とは、本当に香を焚くことであろうか、それとも煙草を吸いながら詩句を練る芥川が遊びにそう書いたのであろうか。

井川恭宛の漢詩は前のと殆ど同じなので、ここで省略する。

次は、小野八重三郎宛の漢詩である。

簷戸蕭々修竹遮 寒梅斜隔碧窓紗
幽興一夜書帷下 静読陶詩落燭花

「修竹」も「寒梅」も前述の通りである。「落燭花」は「書燈」の項に当たるであろう。この詩も梅から連想した言葉が多い。

最後は、浅野三千三宛の漢詩である。

寒更無客一燈明 石鼎火紅茶靄輕
月到紙窓梅影上 陶詩読罷道心清

この詩に「燈明」があり、「月」があり、「梅」がある。やはり、「梅花に対する感情」に描かれる梅の世界である。「石鼎」は火鉢のことであろう。火鉢でお湯を沸かし、その熱湯でお茶を入れる。一人で窓に映る月の反射を眺めながら、茶を啜り、本を読むという状況だろう。

この時期の芥川は漢詩を作るときに、特に「梅」を意識し、梅から連想したものをたくさん詩に入れる。つまり、「梅」を中心に膨らませたものである。では、なぜ「梅」なのか。これについて前にも少し触れたが、「梅花」といえば、芥川はすぐ中国の文人趣味を思い出す。漢詩を書くのには、必ず中国的なものを書かなければならないと芥川は考えていたのであろう。だから、桜など日本的なものは決して使わない。鼎でなくても「石鼎」という。陶淵明の詩を読んでいなくても、「陶詩」にする。

以上の四首の漢詩を読めば、作者の孤高な性格が読み取れる。例えば、年末年始なのに、それは自分と全然関係なく、書斎にはお正月の雰囲気も何もない。ただ読書に耽るだけである。

注1：『追憶』は一九二六年（大正一五年）四月一日発行の『文芸春秋』第四年第四号から一九二七年（昭和二年）二月一日発行の同雑誌第五年第二号まで、一回にわたって連載したものである。芥川龍之介の没後、『侏儒の言葉』に収録された。「学問」は全四十四の章で構成された『追憶』の第二〇の章であり、「幼稚園」「相撲」「宇治紫山」と一緒に『文芸春秋』第四年第八号（一九二六年八月一日に発行）に掲載したもの。

注2：「芥川龍之介年譜」（一九二五年四月一日に新潮社から刊行された『現代小説全集 第一巻（芥川龍之介集）』の巻末に掲載された自作年譜）によれば、明治三十五年の事について次のように書かれた。

三十五年 実母を失ふ。此頃より英語と漢学とを学ぶ。英語はナショナル・リイダアより始め、漢学は日本外史より始む。

「小説を書き出したのは友人の煽動に負ふ所が多い」（一九一九年一月一日発行の『新潮』第三〇巻第一号に掲載されたもの）にも、「傍ら十歳位の時から始めてゐた英語を漢学とを習った」という記述があった。

注3：前掲の「小説を書き出したのは友人の煽動に負ふ所が多い」に、「中学時代には、泉鏡花のものに没頭して、それを悉く読んだ。漢詩も可成り読んだ」と書いてある。

注4：一九二四年（大正一三年）一月六日発行の『サンデー毎日』第三年第二号に掲載された随筆。

注5：一九二四年（大正一三年）二月一日発行の『中央公論』第三九年第二号に掲載された随筆。

注6：原文は「逋不娶、無子、所居多植梅、畜鶴、泛舟湖中、客至則放鶴致之、因謂“梅妻鶴子”云。」である。

注7：『太平御覧』の「地部六、羅浮山」に次の記述がある。

羅浮山記曰、羅、羅山也、浮、浮山也、二山合體、謂之羅浮、在層城・博羅二縣之境、有羅水、南流注于海、舊説、羅浮高三千丈、長八百里、有七十二石室、七十二長溪、神湖神禽、玉樹朱草、相傳云、浮山從會稽來、今浮山上猶有東方草木、又曰、鮑靚字子玄、上黨人、博究仙道、為南海太守、晝臨民政、夜來羅浮山、騰空往還。

注8：原文は：

梅花村在山口、前對麻姑玉女二峯、深竹寒溪、一往幽折、人多以藝梅為生、牛羊之所踐踏、皆梅也。

注9：『龍城録』の「趙師雄醉憩梅花下」によると、

隋開皇中、趙師雄遷羅浮、一日天寒、日暮在醉醒間、因憩僕車于松林間酒肆、傍舍見一女人淡粧素服、出迎師雄、時已昏黑、殘雪對月色微明、師雄喜之、與之語、但覺芳香襲人、語言極清麗、因與之扣酒家門、持盃相與飲、少頃有一綠衣童來笑歌戲舞、亦自可觀、頃醉寢、師雄亦矇然、但覺風雲相襲、久之時東方已白、師雄起視、乃在大梅花樹下、上有翠羽啾嘈、相須月落參橫、但惆悵而已。

注10：『梅妃傳』は唐の曹鄴の書いた小説である。一説に、この傳は宋の南渡前後の作品で、唐人の作ではないという。